

# 令和5年度 第3回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和5年11月27日(月) 14:30~16:30

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀(福知山公立大学地域経営学部准教授)

丹後「子育て」サポート協議会委員3名

多々納智(京都府立宮津天橋高等学校 教諭)

野木俊宏(京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長)

櫛田啓(社会福祉法人みねやま福社会 てらす峰夢施設長)

各市町教育委員会担当者3名

事務局(丹後教育局)



4 第1・2回の協議概要の説明・アンケート結果説明(事務局より)

5 協議

(1)「R5 高校生意識調査アンケートHP掲載及び各校への返却について」

① HP掲載としては、提案どおりの体裁でよい。

② 各校へ返却する際については、本協議会顧問・委員に説明したものと同様の説明をするのがよい。

(2)「アンケートの結果分析について」

① 統計的な変化は何%の差を変化と見るのがよいのか。

・例えば5%以上を有効にするなどし、解釈を入れる場合がある。この2年間のデータでは、まだ判断しづらい。

・アンケート結果の傾向は各校や学年によって違いがある。

・学舎制になっての初年度は、昨年度の3年生からになる。学舎制の各校の変化を見取る材料の一つではないか。

・丹後全体としては、何年間かデータを取り、比較していくことが望ましい。

② 各校への返却について

・今年度と昨年度との結果の比較を示すことが望ましい。

・各校ごとに前年度との比較があれば、各校の取組の状況と照らし合わせて分析しやすいのではないか。

- ③ アンケート結果から見取れる主体性について
- ・アンケートⅠ(6)「丹後地域をより良くできる」に今年度「あなたの行動で」が追記されたことにより、自分の行動に責任を持たないといけないと感じている印象がある。
  - ・「あなたの行動で」が入り、自分事としてアンケートに答えたことにより数値が下がった。この結果は妥当と考えている。
  - ・昨年度の結果から「高校生としては、誰かがやってくれると思っているのかもしれない」と感じていた。
  - ・今年度も結果同士のギャップは変わらない。地元が好きなのに住まないと答えた割合、丹後では働きたくないのに関わりたいと答えた割合など、それぞれに対し「好きならなぜ」と思う。高校生の考え方に疑問がある。
  - ・アンケートの問いが具体的になると数値が下がっている。
- ④ 主体性を阻害するもの
- ・高校では、課題解決について学んでいるが、一昨年、昨年の生徒は「課題はA Iが解決する」と思っている。
  - ・地域では毎年、高校生を対象とした事業を実施するが、主体性をもって参加する生徒が少なくなっている。そもそもの参加数が減っている。コロナの制限が緩み、イベントも増えたことで、高校生が忙しくなっていることも要因の一つとなっている。
- ⑤ 地域との主体的な関わり
- ・探究活動について、地域に自分から関わろうとできる生徒は少数であることから高校としては、「生徒の興味や楽しみ」とリンクした仕掛けの必要性を感じる。例えば、コンペティションを行い、市町へ提案するような取組などが考えられる。

#### アンケートの扱い方

- ・今後もアンケートを継続し、数年間のデータを経年比較していく。
- ・協議会としては、主体性に関わる項目を中心に分析する。
- ・各協力校への返却の際は、前年度との比較を示し、各校が自校の取組状況との関連にも目を向けやすい提示をする。

#### (3) 「アンケート結果を踏まえた自立・成長を促すサポート環境について」

- ① 高校生とPTAとのアンケート結果の違いから
- ・PTA役員の方は子育てや教育、社会参画に対してより意識の高い方が多いという印象がある。そのうえで、このPTAアンケートの結果を丹後の大人の見解と見ることができるのか。
  - ・丹後の課題に「仕事がない」と回答している割合が高いが、宮津市の有効求人倍率は高い。京都市と比べても遜色がない。仕事はあるが、やりたい仕事がないだけ。

- ・仕事マッチングサイトを利用して、日雇いで様々な地域から様々な理由で丹後に働きに来ている人がいる実態がある。その人達と子ども達が混ざり合うことで何か学びが生まれる可能性もある。
- ② 課題解決型の体験
- ・子ども達が課題解決に向けて、何とかしようとする体験を味わわせることで主体性に関わる結果が変わっていくのではないか。
- ③ 企業との連携
- ・コロナ禍でも業績アップしている企業もある。その経営者の精神に触れることはよき学びとなる。成長志向に触れると子ども達も意識が変わっていく。
  - ・「自分の行動で丹後地域をよりよくできる。」と考えている主体性を備えた生徒とのつながりが持てるように、企業側ももっとオープンになることが望ましい。社会がよりよくなることを大切にしている企業があり、業績も伸ばしている。そういった企業が子ども達とマッチングし、成功体験を一緒に作れるとよいのではないか。
  - ・塾のように、日常的に子ども達が企業の仕事に触れる機会があれば面白い。
- ④ 素敵な大人との出会い
- ・学校の探究活動などで、子ども達には、カッコいい大人との出会いを大切にしてほしい。熱量をもって語りかけてくれる大人との出会いは、子ども達の心に強く印象を残す。
  - ・家庭教育支援チームと連携した中学校での家庭教育支援基盤形成事業では、15歳からの未来年表作成ワークショップが実施された。その中で、自分の子どもを授かるつもりはないと考えていた生徒が、支援チームの大人との出会いによって、将来子どもを授かりたいという考えに変わった。
- ⑤ 開かれた学校
- ・学校教育に関わる者全てが学校を開いていく意識をもつことが大切である。その上で、学校は、地域課題に対する学びだけでなく、様々な学びを楽しく発信していくことも大切である。
- ⑥ 異文化に触れる体験
- ・子ども達が外国に触れる体験をすることが望ましい。
  - ・多様性を学ぶことも含めて、国際交流の体験が大切ではないか。
  - ・企業が資金を出し、子ども達が留学できる環境づくりを進めるなど、地域の企業も一緒になって地域人財の育成を図るような仕組みができればいい。
  - ・外に出ることで気付けることがある。自国が恵まれた状況にあることを感じられることも大切な学びである。平和を知らない国の子ども達が日本で平和を経験したことで、「こんな国をつくりたい。」という希望をもつことにもつながった例もある。

#### 丹後の子ども達の自立・成長を促す大人の仕掛け

- ・開かれた学校・地域人財の育成を目指す企業の取組・異文化交流の場の設定
- ・子ども達が、きらきらと輝く大人と出会える場の設定

## 6 指導助言（杉岡顧問）

### (1) アンケート結果について

- ・サンプル数の増加、前年度やPTAとの比較も含め、好印象である。
- ・感覚値としても、妥当な結果と考える。現時点としてのエビデンスになる。
- ・投票率に似ている。主体性に関わる項目について、何もしなければこのような結果になるのは当然である。そう考えると大人と子どもをつなげる場の設定など、行政や地域の介入も必要だといえる。
- ・気になったのは、「課題について話し合っている」に対する「はい」という回答の高校生は30%、大人75%の差。このねじれについては、注視すべきではないかと考える。

### (2) 子ども達の自立・成長を促すサポート環境について

- ・カッコいい大人を家庭、職場、地域に見出す。2市2町が合わされば豊富な人財を確保できる。
- ・国際交流の場は、行政と企業が大きな役割を担う可能性はある。
- ・学校は開こうとしているが、十分ではない。学校側にも何らかの仕掛けがある。例えば、オープンファクトリー、修学旅行、市町を超えた留学による人の混ざり合いなど。

### (3) 統計的な数字の捉え方

- ・ロジャースのイノベーター理論によると、アーリーアダプターという15%くらいの人々へのアプローチから変化を起こすことが大切になる。そこからアーリーマジョリティーという50%の人々へ波及していく。
- ・「あなたの行動で丹後をよりよくできる」と考えている19.1%をポジティブに見ていく。この19.1%は丹後の救世主になり得る存在であり、そこにどうアプローチしていくかが大切ではないか。そのためには具体的な事業が必要になる。カッコいい大人とのマッチングを通して、首長への提言ができる機会まで作れたらよい。

### (4) 他地域での事業事例

- ・1000万円の予算を組んで地域人財の育成につながる事業を展開している自治体もある。（愛知県新城市の例）
- ・上限は1000万円として、最低でも行政と企業で50万円を捻出し、その幅の中で丹後でも実現できないだろうか。塾ではない塾が丹後にもできれば面白い。

可能性を秘めた20%弱の存在への働きかけ・行政と企業が連携した具体的事業の構築

